

コロナ禍による不況が深刻化する中、トマ・ピケティが『21世紀の資本』で提案した所得・資本格差問題の改善策が思い起こされる。世界的な資本累進課税によって格差を解消するアイデアだが、租税回避の実態から空想の理論と揶揄された。

わが国では持続化給付金や雇用調整助成金など租税に基づく「公助」に救われたが、ひと息ついても長くは続かない。生計への不安が広がる中、閑谷学校創学350年を記念した市民ミュージカルも暗礁に乗り上げた。

12月20日に上演を予定している会場の収容人数を、3密回避のため定員の50%未満にしなければならぬ。備前市の会場費軽減や人的支援といった公助のほか、協賛金として閑谷学校を応援してくださる団体・個人からいただいた「共助」が頼りだが、チケット収入が半減すれば立ちゆかない。

岡山県青少年教育センター 香山 真一
閑谷学校 所長

一 日 一 題

助け合いの心

しかし、前年の秋から毎週末稽古を重ねてきたキャストやスタッフの苦勞を思えば、なんととしても上演にこぎ着けたい。そこでクラウドファンディングを立ち上げ、上演や稽古の様子を収録したDVDを販売して収入減を補うことにした。

「創学350年！ 閑谷学校の歴史を世代を超えて届けるプロジェクト」と名付けたウェブページを作り、地域の伝統文化継承に賛同してくださる方を募った。返礼品にはDVDのほか、『あいうえお論語』や備前焼のピアマグを用意した。ピアマグは備前商工会議所からの共助である。目標は80万円だったが、県内外の200人を超す方々から200万円を超える激励と寄付をいただいた。

心のこもった共助は人を勇気づける。応援をしてくださった方のためにも、ぜひとも成功させたいと稽古に熱がこもる。